

琉球大学学術リポジトリ

自閉性障害児における他者との関係の形成過程

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属障害児教育実践センター 公開日: 2008-03-10 キーワード (Ja): 愛着関係, 遊び, ふり遊び, 言葉, こだわり キーワード (En): 作成者: 野原, ゆかり, 神園, 幸郎, Nohara, Yukari, Kamizono, Sachiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/5079

自閉性障害児における他者との関係の形成過程

野原 ゆかり 神園 幸郎

Formative Process of the Relatedness with Other in Children with Autism

Yukari NOHARA* Sachiro KAMIZONO**

本研究は、自閉性障害児が特定の他者（以下「他者」とする）とどのような関係を形成するのか、また、この関係が彼らの発達にどのような関連性を持つのかについて他者理解の視点で記述し、検討することを目的とした。話し言葉を持つ自閉性障害児の男子を対象児として、筆者を含めた女子学生2名が「他者」として関わった。

その結果、対象児はどちらの「他者」とも確実に愛着関係を形成し、最終的には質的に高い愛着関係を成立させた。さらに、このことが「他者」との関係以外（象徴遊び、言葉、こだわり行動）の発達にも影響して、本児の発達が促された。

keywords: 愛着関係、遊び、ふり遊び、言葉、こだわり

I. はじめに

近年、自閉性障害が個体の能力つまり生物学的要因と心理社会的要因の双方の問題として捉えられるようになった流れの中で、自閉性障害を捉える枠組みの一つとして「心の理論」欠如仮説が注目を浴びた。この仮説で、Frith U, Leslie A, Baron Cohenらは誤った信念課題などを用いて、同年齢の健常児群、知的障害児群、そして自閉性障害児群について他者の「心を読む」能力を調べた。その結果、自閉性障害児群は他の群に比較して、他者の「心を読む」ことに著しく困難を示すことを明らかにし、彼らには人間の基礎的な能力の一つである「心を読む」枠組みが欠如していると結論づけた。そのために、自閉性障害において対人関係、コミュニケーション、想像力の障害をはじめとした様々な問題が生じていると指摘した。

この「心の理論」欠如仮説に対する別府（1997）の意見はこうである。「心」の発生について触れないまま、また「心」を無人称的に扱って、「心を読む」枠組みを設定し、単に課題に通過したか否かで自閉性障害児が「心を読む」能力を持ち合わせていないと結論づけて良いのだろうか。

このことに関して木下（1998）は、心なるものが無人称的な存在ではなく、現実のコミュニケーション過程の中で、正に「私の心」や「他者の心」として存在するという視点から、「心」についての問題を捉え直す必要があると述べた。そして、その際、一人一人の置かれた具体的な状況の中でその検討が必要だと指摘している。

別府はこのような木下の考えを取り入れ、「心の理論」の枠組みを前提としたトップダウン式の研究を批判し、他者理解そのものをボトムアップ式に追求した。別府は、麻生の提唱する他者理解の4つの段階（「情動反応としての他者理解」、「振る舞いとしての他者理解」、「感情移入による他者理解」、「概念的他者理解」）の中の「振る舞いとしての他者理解」の段階に焦点を当て、具体的な愛着対象との関係形成過程において、自閉性

*Okinawa Prefectural Nishizaki School
for the Mentally Retarded

**Faculty of Education, Univ. of the
Ryukyus

障害の他者理解について検討を行った。その結果、制限があるとは言え、つまり「振る舞いとしての他者理解」のレベルにおいては無発語の自閉性障害児にさえ、他者が情動や意図を持つ存在であるという認識が可能であることを立証した。別府は、自閉性障害児における愛着対象の形成の発達には、具体的な行動を愛着対象に求める段階と心的な支えを求める段階があることを見いだした。さらに、具体的な愛着を求める段階には、①快を求める段階と②不安、不快を快へ転換するために求める段階があり、①から②へと移行する時期に他者を行為の主体として認識するようになったと述べている。そして、他者を行為の主体として認識できることは、自らに快の情動を引き起こす活動を愛着対象と行っている場合に自ら快の情動経験を行うだけでなく、愛着対象との間で快の情動共有経験を可能にし、そのような経験を多くの人とさまざまな場面で持つことが、愛着対象が意図や情動を持った存在と認識する契機になっているのだと推察している。このことをもとに、別府は自閉性障害の社会的障害に対する指導や援助のあり方として、他者認識の質的変容を図る試みが重要であり、このことは母親に代表される単一の養育者との愛着関係の改善だけでなされるのではなく、複数の大人との愛着関係を取り結ぶ場（例えば、通園施設、保育所）を保証することが重要であると指摘している。別府（1997）は自閉症児に対する援助のあり方として、母親以外の他者にも開かれた関わりについて重要な示唆をした。

この別府の示唆とは対称的に、愛着対象を母親に限定した研究として、小林の研究がある。小林（1996）は自閉性障害の問題を母子の関係性の障害（Smeroff & Emde, 1989）と捉え、母子の情動的コミュニケーションを重視した治療的介入を試みた。小林は母子関係を活発に展開させることが、自閉症の症状改善や予後の良好性を保証するとし、自閉性障害における母親のあり方の重要性を指摘した。

しかしながら、筆者は自閉性障害の社会的障害を改善するには母親に限定した二者関係だけを展開させることで十分であろうかという疑問を持つ。常に生活を共にしている母親は一般の他者とは異なる特別な他者であるため、他者理解の契機を導

くことにつながりにくいのではないかと考えるからである。亀井（1985）は、自閉性障害においては母子関係が二者関係の主要な部分を占めることは確かであるが、彼らは同胞者の一人、親密な教師の一人、友人のひとりとの間にも対話的な関係を持つことが出来ると述べている。つまり、自閉性障害においても健常児と同様に母親以外の家族、家族以外の他者へと人との関わりを拡大していく可能性を十分に持っているということである。

筆者は、母親のみに閉じた関係だけではなく複数の他者と関係を持つことが、彼らの他者理解を導き、別府（1997）の言うように社会的障害をはじめとする様々な障害に改善を与えるのではないだろうか考える。しかし、別府の指摘が普遍性を持つものか否かについては未だに明らかではない。彼の論文の結語においても、他者理解という切り口で自閉性障害が複数の他者と関係を形成することを通して見えてくる社会的能力をボトムアップ式に捉えることが、具体的な指導に対し必要な資料を提供することであり、今後このような方向で研究が積み上げられることを期待したいとしている。

そこで本研究では、別府の指摘を受け、自閉性障害児が「母親以外の他者」（以下「他者」と略す）とどのような関係をどのようなプロセスで形成していくかについて、「他者」との関係の変容過程を他者理解の視点で記述することを一つの目的とする。

さらに、「他者」と関係が形成されるのと並行して、彼らの対人関係以外（例えば、象徴能力）の発達にも何らかの影響が及ぼされることが予想される。従って、「他者」を形成することが、対人関係以外の他領域の発達とどのような関連性を持つのかについて検討することを二つ目の目的とする。

最後に、特定の他者が単一の他者から複数の他者へと複数化する際には、最初の他者との関係がそれ以外の他者との関係にも何らかの影響を及ぼすことが考えられる。そこで、自閉性障害において特定の他者が複数化する際の影響について検討することを三つ目の目的とする。

II. 研究方法

1. 対象

対象は、話し言葉を持つ自閉性障害児（以下、対象児Rと略す）R君である。以下に、生育歴、セッション当初の様子、そして行動の特徴の概要を示す（表一対象児プロフィール）。

表一対象児Rのプロフィール

対象児	性別	年齢	DQ	言葉	指さし	ふり	興味
R	男	4:6	68	○	○	○	数・形

<生育歴>

本児は1993年生まれ（4:6）の男児である。母31歳、父35歳の時に第一子として、仮死状態で帝王切開により出生。周生期、2ヵ月と4ヵ月の時に切迫流産しかかった。定頸3ヵ月、始歩12ヵ月頃で乳児期に運動面の遅れはなかった。1歳6ヵ月頃、病院、児童相談所、保険相談センターにて自閉症と診断された。既往歴として、私語2ヵ月に引きつけがあった。また、時期は不明であるが突発性発疹、急性胃腸炎にかかった経験がある。3歳の終わりに母子通園施設に1ヵ月通い、その後保育所に2年入所した。セッション開始時、幼稚園で11ヵ月目を過ごしており、来年度には小学校入学を迎える。VTR収録初回時（4歳6ヵ月時）においては、既に言語による他者との簡単なやりとりが可能であった。また、指さしの理解もほとんど可能であり、ごっこ遊び、見立てについても1, 2回目のセッションから出現した。また、その時期の新版K式によるDQは68で軽度の精神遅滞の水準にあった。

<セッション当初の様子・行動特徴>

「他者」との初めての遊びでは、母親のことを何度も口にしており、明確に母子分離への不安が確認された。母親を気にかけるときの本児は、遊びに集中できなかつたが、時間が経つに連れて一人遊びに夢中になり、さらにはその日のうちに「他者」との「もの」を介したやりとりが可能になった。本児は、「数字」や「形」に強く興味を持っており、例えば、モンテッソリー教具のペグ

差しや刑版羽目、また数字カードを並べて遊ぶことが多かった。これらの遊びは、本児のこだわりの遊びであるため、一人遊びになる傾向が強かった。

2. 分析

1) 分析資料

本研究では、以下の4点を分析の資料として扱った。

- (1) 20～30分収録した『「他者」との遊び場面』のVTR（2週に1回の割合で収録）
- (2) VTRをもとにしたトランスクリプト
- (3) セッション当日の対象児についてのメモ

2) 分析

分析はセッション後2～4日以内に、セッションに関わった3～4名で行った。分析の観点は以下の3点である。

- (1) 遊びの全体的な特徴
- (2) 対象児の行動特徴
- (3) 他者との関係性

III. 結果と考察

本研究では対象児Rについて特定の他者との関係の変遷を軸に、対象児の「他者」との関係の変遷、それに伴う他領域の発達を追った。

特定の他者は、他者T、他者Nの2者である。初めに、他者Tとのセッションが第1回から第19回まで行われた。他者Tの卒業に伴い、第20回から第37回までは、撮影者であった筆者が「他者」となった。それぞれの「他者」との関係が続けて以下に説明する（表1参照）。

1. 他者Tとの関係

第1回から第19回までのセッションを通して、他者Tとの関係の特徴が大きく三つに分類された。それらを第I期から第III期として、時期毎の特徴を以下に説明する。

(1) 第I期（第1～5回）

分離不安と関係の接近

「他者T」との遊びに移行するため、R君は母親と分離することになった。R君は意外にすんなりと母親と分離できたものの、その日初めて会っ

表1 他者との関係の形成と他領域の発達

特定の他者 (T, Y) との関係		他領域の発達		
他者との関係		象徴遊び	言葉	こだわり
時期	時期の特徴	個々に閉じた象徴遊び	エコラリアが多い	強固なこだわり ・回転 ・紙に書く
第Ⅰ期 1～8回	<p>ダイナミックな関わりによる 母子分離不安と解消と愛着行動の出現 ・母子分離不安→「もの」を介したTとの遊び</p> <p>↓</p> <p>ダイナミックな遊び (追いかけっこ、トランポリン)</p> <p>↓</p> <p>分離不安解消、他者Tへの愛着行動 愛着関係の成立 (不安に立ち向かう心の支えとしてのT)</p>	<p>他者を介さないコピー的遊び</p> <p>「動作的表象としてのふり」</p> <p>他者を意識した遊び</p>	<p><コミュニケーションの活性化></p> <p>意思表示</p> <p>行為の言語化</p>	<p>こだわりが柔軟になり始める</p> <p>・ビーズ通し</p> <p>・三輪車回転</p> <p><例外></p> <p>10、15、19回は不調の為、強固なこだわり</p> <p>・数字カード並べ</p> <p>・三輪車回転</p> <p>・数唱</p>
第Ⅱ期 9～14回	<p>愛着関係の成立を前提とした実験的試み 「家」の導入→物理的距離の出現</p> <p>↓</p> <p>Tとの関係の希薄化</p>	<p>「象徴的行為によるふり」</p>	<p>他者を意識した言葉</p> <p>情報を提供する言葉</p>	<p>10、15、19回は不調の為、強固なこだわり</p> <p>・数字カード並べ</p> <p>・三輪車回転</p> <p>・数唱</p>
第Ⅲ期 15～19回	<p>愛着関係の深化による新しい遊びの出現 (不安に立ち向かう心の支えとしてのT) ・ケンケン遊び</p> <p>Rは体調が悪くてもTと関係を保持できる 確実な要着関係</p>		<p>他者への巧妙な説明</p> <p>自己の言葉の修正</p>	
他者Nとの関係				
第Ⅰ期 20～25回	<p>他者Nへの不安の軽減と関係の接近 ・他者Nへの不安→「もの」を介した遊び</p> <p>↓</p> <p>ダイナミックな遊び (怪獣追いかけっこ)</p> <p>↓</p> <p>不安の軽減、愛着行動の出現 愛着関係の成立</p>	<p>複数の場面に解放された遊び</p> <p>物の二重化 真の象徴能力</p>	<p>感情的な表現</p> <p>他者の意図を探る表情</p> <p>共同注視を求める言葉</p> <p>一人二役的な言葉</p>	<p>こだわりが自己終結</p> <p>・数字カード眺め</p>
第Ⅱ期 26～30回	<p>パターン化した人形遊びにより関係が希薄化 人形遊び→他者Nとの関係の深化</p> <p>↓</p> <p>人形遊びがパターン化→関係が希薄化 やりとり不成立 (底流には愛着関係)</p>	<p>柔軟なやりとりを通じた象徴遊び (すり合わせ)</p>	<p>誤用論的理解</p>	<p>・時計</p>
第Ⅲ期 31～37回	<p>人形を排除した生身の関わり 生身の関わり→相互に意識し合う</p> <p>↓</p> <p>遊びの活性化 新しい遊び ・かくれんぼ</p> <p>(不安・不快な場面でNを求める) (社会的参照の対象としてのN)</p>		<p>他者と感情を共有する言葉</p>	<p>明確な「こだわり」行動が消失する</p>

た他者Tに対する不安は隠せなかった。面談のために母親が研究室へ入るのをプレイルームのドアからしっかり見つめていた姿がR君の不安な心を象徴した。

R君の不安な様子はしばらく続いた。そのことは、一つ目にR君の母親への言及が繰り返され、遊びに集中できなかったことに表れた。「お母さん、向こうで勉強してる」「お母さん、3階にいる」などと心細そうな表情で母親のことを口にしては、後から後から遊びを変えた。このように母親の不在を気にかけて、母親について言及することは第4回のセッションまで継続した。二つ目に、他者Tとの遊びの間、R君が団子の玩具や黄色のボールなどの「もの」を終始手にしていたことである。これは、母親との分離不安による移行対象の表れだと考えられた。これらのことが、R君の不安な気持ちを明確に示した。

回を重ねるに連れ、R君の母親についての言及は減少して、少しずつ他者Tとのやりとりが生まれた。例えば、R君が羽目板を外すのに手間取っていると他者Tが手を添えたりしながら教えた。すると、R君は他者Tに教えられた通りにして羽目板を完成することができた。このように両者がやりとりする場面は次第に増えた。そして、大好きな型羽目の遊びを通して、他者Tとのやりとりが広がって、母親についての言及は減少した。それに伴い、他者Tを自分の遊び相手として受け入れられるようになった。さらには、R君は、「これで遊ぶ」と言って、他者Tにトランポリンを要求するまでになった。また、他者Tがトランポリンを組み立てる時にはTに寄り添ったり、手伝ったりした。

このように、少しずつTに慣れたR君は、トランポリンが完成すると早速その上で恐竜の玩具を使って遊び始めた。R君がTの指を恐竜の口に入れると、他者Tが「いたーい」と言うやりとり遊びが始まった。この遊びにより、R君の笑いが増え、他者Tを見る回数も増加した。しかしながら初めてのセッションであったため、二人の心理的距離は明確であった。このことは、二人の遊びに常時「もの」が介在したことが示した。しかしながら、初回からやりとり遊びを成立させたことは、接近の兆しだと見なすことができた。

以上のことを契機として第2回以降、二人の間は確実に接近した。トランポリンで遊んだこと(第1回)がR君に快をもたらしたようで、その後もトランポリンを使った遊びが頻出した。

トランポリンでの遊びは一樣ではなく、その使い方は次第に変化した。恐竜遊びの台としてトランポリンを使った第1回目とは異なり、第2回にはトランポリンのそのもので飛び跳ねて遊ぶ、本来の遊び方をした。次に、トランポリンを障害物として扱い、周囲を走り回って追いかけてこするようになった。二人のトランポリン遊びは次第にダイナミックな遊びへと変化した。このようにダイナミックに動き回る遊びでは、二人は笑顔と笑い声が絶えず白熱した。

このようなダイナミックな遊びを通して、R君と他者Tとの関係にも変化が見られた。ダイナミックな遊びでは、飛び跳ねたり、駆け回ったりと動きが活発になることに伴って、心身共にリラックスした状態が得られ、その上で二人の身体接触の機会が増加した。二人が大声を出して笑い合い、情動を共有している場面が多かった。そのような場面を象徴した出来事がある。R君が追いかけて逃げ回った挙げ句、床に倒れ込んだ他者Tの上に乗ったときのことである。「降参」と言って床を叩いたTの頬を、R君が思いっきり叩いてしまう共鳴動作があった。(表2)。

このようなことを背景として、二人の関係は接近した。そのことを表す場面がある。二人がトランポリンで飛び跳ねているとき、一緒に飛んでいた他者Tが座ると、R君が必死になって飛び跳ね、

表2 共鳴動作

R	T
逃げるTを追いかけて、Tの上に乗る	はって逃げる
ボールでTを叩く	「負けたー、負けました」
笑いながらボールで叩く	「負けでーす」
Tの頬を叩く	「参った参った、降参」床を叩く
	「いたーい」

一緒に飛んで欲しいと要求することがあった。また、他者Tが「一休み」と言って座り込むと、T同様座り込むというようにTに寄り添う姿も見られるようになった。

R君とTとの接近を背景として、R君の母子分離不安が次第に軽減し、さらには消失した。まず、R君の母親についての言及が減少し、第5回には「お母さんバイバイ。また後でお迎えに来てね。」と自ら母親との別れを告げるまでになった。また、団子を初めとした移行対象としての玩具も遊びの道具として変化した。

以上のように、R君はTとの接近に伴い確実に分離不安を消失させた。そして、そのことがR君と他者Tとの距離をさらに縮め、遊びにも変化をもたらした。「もの」を介したイメージ遊びが出現するようになったのである。例えば、第3回には積木を並べてそれを椅子に見立てバスごっこがなされた。また、ショベルカーのショベルをシャワーに、ペグをシャンプーに、そしてわかかをシャンプーハットに見立ててお風呂ごっこもなされた(表3)。

表3 お風呂ごっこ

R	T
赤い輪を頭に乗せる 「頭も、シャンプー…」 「シャンプーハットして る」	「シャンプー？」
「シャンプーハット」 羽目板を頭に持って いき、頭にこすりつ ける。 「ごしごし、シャン プー。」	「シャンプーハット だねー。かっこいい ねえ。シャンプーハッ トだよ。」 「洗ってるの？ごし ごし。」
「お風呂でシャンプー。」	

以上のことを背景として、R君の他者Tへの愛着行動が出現するようになった。一つ目は、R君がTを「先生」と呼ぶようになったことである。従来、Tの呼名は定着しておらず、R君は撮影者とTに区別を付けることはなく、共に「お姉さん」と呼んでいた。ところが、数回のセッションを通

して他者Tとの関係が接近し、他者Tを自分と遊んでくれる主体として認識するようになったことによって、Tに対する呼名が定着した。二つ目に、追いかけてこの途中でTが「先生も団子欲しいな」というと、自分の持っている物と同じ物を拾って他者Tにあげるといような授受行為が見られた。他者Tの要求にしっかり応えたのは、R君に他者Tと同じ「もの」を共有したいという愛着の思いがあったためだと考えられた。三つ目に、従来Tが恐怖を抱いていた、「高くて不安定な場所」などの対象に、果敢に挑戦する行動が見られた。これは、他者Tが側にいれば不安な場にも立ち向かえるという他者Tへの愛着の表れである。つまり、R君にとって他者Tが安全基地になりつつあることを示している。さらに、このころ他者TがR君を迎えに行くと、再会の喜びを表現するようになった。このことも他者Tに対する愛着の表れの1つである。

本期は、分離不安を持っていたR君が、他者Tとのダイナミックな関わりを通して、次第に関係を接近させた時期である。それに伴い、母子分離不安を確実に軽減させ、消失させることとなった。Tに対する愛着行動が相次ぎ、他者Tとの愛着関係を確立させた時期だと言えることができる。

(2) 第Ⅱ段階 (第6～14回)

実験的試みと関係の深化

第Ⅰ期は、両者の愛着関係が成立した時期であった。R君と他者Tのこのような関係を前提として、他者Tの研究の目的であった、「他者との関係の成立が自己表現活動、そしてコミュニケーション活動を促す」という仮説を検証することとなった。その手立てとして、疑似の「家」を導入した。

疑似の「家」を導入したことはR君に新鮮さを与えたようで、R君は「家」を目にした途端、とても生き生きとした表情を見せた。また、「家」が段ボールで屋根付きのカラフルなものであり、さらに色画用紙で装飾がされていたことから、予想以上にR君の興味を誘発した。R君は次から次へとイメージを膨らませ、「家」を使って活発に遊んだ。

第9回では、初めに「お掃除する」と言って、はたきに見立てたと思われる棒で「家」を叩いた。さらに、棒で叩く音から実際、自分の家の近くで

行われている薬屋さんの改装工事を思い出したようで、次に「薬屋さん」になると言って、「家」の中に栄養剤に見立てた木の棒やお菓子に見立てた積木を置いたりして「薬屋さん」を作り始めた。「家」に対する掃除のイメージから始まった遊びから、さらに「薬屋」のイメージへと広がった。そして、そのイメージを他者Tに伝えたいという意思から、R君は従来見られなかったほどに、言語表現が豊かになり、Tとのコミュニケーションが活性化した(表4)。

表4 コミュニケーションの活性化

R	T
	「僚人君、お掃除で きた？」
「出来てない、まだ こっちでは、…出来 てない」	「僚人くーん。」手を 振る
「掃除、お掃除」	「お掃除」 「僚人君」
「R、Rは掃除して る」	「掃除してる？掃除 してありがとう」

しかしながら、この遊びはどこかしっくりこなかった。R君はイメージに伴い、後から後から言葉を発し他者Tとのコミュニケーションを活性化させたが、他者Tとの遊び自体のやりとりが展開しなかったからである。活発な言葉のやりとりと乏しい遊びのやりとりの間には大きなズレがあり、そのために二人が関係を絡ませて遊ぶことはなく、関係が希薄な遊びになった。

「家」を導入させたことによって、物理的に二人の距離がつくられたことは、言葉を誘発し活発なコミュニケーションを促した。しかしながら、遊び自体はパターン化され面白味に欠けた。

このように他者Tと関係を絡ませて遊べないことは、回を重ねた。そして、そのことがR君自身にも影響した。このことは、例えば、R君が家の中に入ることを拒否したり、他者Tの入っている「家」を蹴飛ばし始めた行為から感じ取れた。R君のこのような行為は、遊びが他者Tとの言葉のみのやりとりとなってしまう、他者T自身とやり

とりしながら遊びたいという思いから出現したもので、「家」に対する拒否の行為なのではないかと考えられた。

R君の「家」への拒否の行為は、次に両者の「家」をくっつける行為に変化した。この行為は、両者の距離を縮めようとしてとった行動だと考えられた。さらには、R君の狭く小さな「家」の中に他者Tを呼び入れるようになった。このことは、R君が他者Tと身体接触をしながら、やりとりをしながら遊びたいという思いを明確に反映していた。そして、R君の他者Tへの愛着が揺るぎないものであることを強く感じさせた。

この時期、R君が母親に要求するときの甘え声で他者Tに要求すること、不快な場面で他者Tに助けを求めることがあった。これらのことは、R君の他者Tに対する愛着の深まりを明確に象徴した。

(3) 第三期(第15~19回)

Rの不調による遊びの変化と関係の深化

R君が他者Tとの物理的距離をなくそうとした行為をしたことから、本期では段ボールに切り込みを入れて窓を作り、ドアを増やして両者がより関わりを持って遊べるような環境を作った。そして、そのような遊びの後、実験的試みを終了し徐々に「家」のない遊びが始まった。「家」を取り扱ったことは、「もの」を介したイメージ遊び、ダイナミックな遊びと多彩で活発な遊びを生み出した。

この時期はR君の状態が不調なことが多く、静かな遊びがなされることも度々だった。しかしながら、常に他者Tとの関係は保持された。例えば、第15回で、R君は全体を通して声に張りがなく、表情にも変化がなかった。そのような状態でR君と他者Tは買い物ごっこをすることになった。他者Tが働きかけてもR君の反応はなく、遊びに集中できない様子であった。ところが、他者Tが指人形を用いて働きかけると、次第に二人のやりとりは変化を見せた。R君は指人形を見て、他者Tとやりとりをするのであるが、先までの他者T自身への反応とは異なり、人形に対する反応はとて良かった。他者Tが人形を使ってR君に「もの」を要求するとすんなりと聞き入れて、反応した。また、他者Tの人形の動きを模倣して自分の人形を動かす遊びを楽しんだ。

従来のR君は不調だと一人遊びになる傾向が強かった。しかしながら、他者Tとの関係が深化した本期では、不調な状態であってもやりとりは保持されて、両者の遊びが成立した。

また、好調な回においては、従来成立しなかったケンケンパ遊びができるようになった。新しく遊びが可能になったことの要因には、他者Tがフラフープ（従来は輪投げの輪を使用）を用いたことによって大きな身体の動きが引き出され、R君の理解がしやすかったことにもよるだろう。しかし、何よりもR君の他者Tと遊びを共有したいという思いが大きな要因であると考えられた。

本期はR君と他者Tとの関係によって、新しい遊びが成立した時期であると同時に、不調なときにも遊びが成立した時期であった。このようにどんな状態であっても関係が保持されることは、R君の他者Tへの愛着がさらに深まり確実に became ことを裏付けている。

(4) 他者Tとの関係のまとめ

初めてのセッションでは、母子分離不安のため、他者Tとの間の心理的距離が明確に表れた。しかしながら、身体接触の多いダイナミックな遊びを通して、二人の距離は確実に接近した。それに伴い、R君の分離不安は軽減されて、他者Tとの遊びが広がり始めた。このような遊びを背景として、R君の他者Tへの愛着行動が頻繁に現れるようになり、第I期はR君とTに愛着関係が成立した時期と見なされた。愛着関係を前提として、第II期では、実験的試みのため「家」を導入してセッションを行うことになった。しかし、言葉のやりとりとは裏腹に二人の関係は希薄なものへと変わった。ところが、そのような中でも二人の愛着関係は確実に、深化し続けた。また、このような関係を基盤として第III期では、R君はどんなに不調な時にも、他者Tとの関係を保持して遊ぶことができ、確実な愛着関係が存在した。

以上のように、R君と他者Tは確実に愛着関係を形成し、それを基盤として遊びは次第に活性化し、深まりを見せた。R君が他者Tを不安に立ち向かう際の安全基地として理解したことが、レベルの高い愛着関係を示す最たるものだと言える。

2. 他者Nと本児との関係

他者Nとの遊びは第20回から37回を通して、関係の特徴が大きく三つに分類された。それらを第I期から第III期として、時期毎の特徴を以下に説明する。

1) 第I期（第21～25回）

他者に対する不安と関係の接近

他者Tの卒業に伴い、「他者」が撮影者であった他者Nへ引継がれ、第20回にR君と他者Nとの初めてのセッションが行われた。R君はいつものように他者Tがいないことを疑問に感じた様子を見せた。

R君には予め、今日は他者Nと遊ぶこと伝えておいたことから、母親との遊びの後にはすんなりと他者Nとの遊びに移ることができた。そして、驚いたことに初めから活発な遊びが展開された。

R君ははじめ、母親との遊びの延長として、ウサギの人形や積木に輪をくぐらせたり、輪を乗せたりして遊んだ。そこに、他者Nが輪を持ってR君の頭に輪をくぐらせたことがきっかけとなり、追いかけてこが始めた。トランポリンの周囲を駆け回り、ダイナミックに遊ぶ中、初めは走り回るだけであったR君が怪獣になりきった他者Nに対して「ゼロ（ゼロ怪獣になって）」と言って、間接的ではあるが要求をした。また、R君が他者Nの頭に輪をかけたり、Nが泣くふりをするとR君も真似て泣いたり、他者Nを模倣することも見られた。

R君はダイナミックな遊びを通して、初回から他者Nに関心を寄せ始めた。他者Nは以前からセッションの撮影者であり、R君は他者Nとは顔見知りであったことが、ダイナミックな遊びを導き、他者Nへの関心を引き出した要因の1つだと考えられた。

しかしながら、やはり二人の間には明確な心理的距離が存在した。そのことは、ダイナミックに追いかけてこをして後、R君が「もの」を介した遊びに向かい、その先は他者Nとのやりとりが乏しくなったことから伺い知れた。追いかけてこをした後のR君は他者Nの問いかけや働きかけにある程度答えるもの、自主的に言葉を発したり、他者Nに働きかけるようなことはなく、また他者Nを見ることさえもほとんどなかった。さらに、R

君を迎えに来た母親に対して、甘え声で「おかあさん」と呼んでいたことから、それまでの他者Nとの遊びに不安を抱えていたことが明確に現れた。

他者Nとの初回の遊びにおいて、R君はダイナミックな遊びでは興奮状態になり、他者Nとの関係性を特に意識することなく楽しそうに遊んでいた。しかしながら、「もの」を介した静的な遊びになり冷静になると、他者Nとの心理的距離が浮き彫りになった。

R君とNは比較的うまく遊ぶものの、第21回以降にも明らかな心理的な距離が伺えた。二人の距離を強く感じるのは、「もの」を介した静的な遊びの時であることが多かった。

例えば、第21回では木の棒を野菜に見立てて「カレーパーティー」をしたことを契機に、保育園ごっこを展開した時がそうであった。そこには、常に二人のやりとりが存在し、R君は遊びの合間に飛び跳ねるようにして歩いたり、他者Nのすることを見て笑うことが多く、両者ともとても楽しそうに遊んだ。一見、遊びは盛り上がっているかのように見えた。そのやりとりでは二人は向かい合ってやりとりを交わすことはなく、言葉に頼ったもので遊び自体は実に乏しいものだった。このように二人が面と向かい合ってやりとりを交わすことがないのは、お互いがまだ相手に対して慣れておらず、緊張しながら遊んでいるためだった。「もの」を介した静的な遊びでは、歩み寄れない二人の距離が明確であった。

しかしながら、一度追いかけてこなどのダイナミックな遊びに突入すると、このような状態は一転した。お互いの顔を合わせ、互いを意識しながら逃げ回ったり、身体接触をして掴まえ合う、遠慮なしの遊びが展開された。身体を動かすことによって、心身共にリラックスし、気持ちが高揚した。それに伴って、両者の心理的距離は一気に縮まって、それぞれが本来の自分の姿をあらわして自然に遊んだ。

このように、「もの」を介した静的な遊び、そしてダイナミックな遊びを交互に繰り返す中、二人の距離は次第に接近した。

例えば、第22回ではビーズ通しをしていたR君と向かい合って、他者Nが寄り添って遊ぶことが

できた。その時には、R君が他者Nのビーズと自分のを見比べて、「Rのいっばーい（Rの方が長い）」などと言いながら、常に他者Nを意識しながら遊ぶようになった（表5）。また、この遊び

表5 他者を意識したやりとり

R	T
	「変かな？でもお姉さん気に入ってるよ」
「Rも気に入ってる」	「気に入ってる？じゃあ、これも使おう」
「Rの負けー」	「R君のは負け？」
「Rのいっばーい」	

の中で、他者Nがビーズを犬の散歩に見立てて歩き回ると、R君はビーズをお尻に付けて「ワンワン」と犬のふりをした。また、他者Nがポケットにペグを入れるとR君も同様にするなど、R君が他者Nに関心を寄せて振る舞うことが多くなった。さらに、第20回では間接的で志向性が感じられないものだったが、直接的なものへと変化した。例えば、R君が自分でビーズを取れないときに、「これ、取れる？」と言ったり、トランポリンで他者Nが飛ぶのを止めて座り込んでしまうと「トントンする」と強い口調で言った。また、R君の側に寄り添って横になっていると、「目、つぶってくださいーい」などと他者Nをしっかりと見て、直接的に明確な要求をした。さらに、このころからR君とNとの会話が一気に増加し始めた。これらのことは、R君が他者Nに関心を寄せ、自分の遊び相手として受け入れたことを裏付けた。同時に、R君と他者Nの心理的距離が接近していることを表した。

このようにR君と他者Nの関係が接近する中、R君の他者Nにする愛着行動がセッションを重ねて増加した。その始まりとして、R君が他者Nの膝に座って、身体接触を求めることが見られた。この行動は、R君が他者Nのすぐ側で遊びを共有したいという思いから出現した愛着行動だと見なされた。また、この日の遊びは、棒で叩かれて怪我をした人にバンドエイドを貼るという遊びであっ

た。その中で、「バンドエイド貼りたいよー。」と母親に言う時と同じような甘え声で他者Nに要求をした(表6)。さらに、母親との遊びの前には、「Nとはいつ遊ぶのか?」「Nと遊びたい。」と他者Nの手を握ってだだをこねることがあった。このように、R君が他者Nとの遊びを待ちわびていたことは、R君が他者Nに対して愛着を示していることを象徴した。R君の他者Nに対する愛着行動が相次いで確認されたことから、この第I期の後半を愛着関係の成立した時期として捉えた。

表6 甘え声での要求

R	T
「痛い」	蜂のふりをし、木の棒でRを刺す 「ぐさっ、チュ」
	「痛い」
とても甘い声で 「バンドエイド貼りたいよー」	「蜂はもう飛んで行った」 「あ、バンドエイド、はい。ちち、大丈夫かい?」

2) 第II期 (第25~30回)

遊びのパターン化に伴う関係の希薄化

愛着関係の成立を基盤にして、R君と他者Nとの遊びは多彩なものへと広がりを見せた。中でもR君は特に人形を使ったイメージ遊びを好んだ。次第にダイナミックに関わり合うような遊びは影を潜めて、それに伴い、人形を使った遊びが継続された。

そのような遊びでは、R君と他者Nが常にやりとりを交わしながら、とどまることなくイメージを膨らませて遊びを展開させた。

次第に展開したイメージ遊びであったが、この遊びにおいての両者の関係は初期と後期で大きく変容した。

初期のイメージ遊びでは、二人の間に常にやりとりが存在し、イメージを作りあげながら遊びが展開した。例えば、第24回では、お店屋ごっこ、お家ごっこ、散髪やごっこが複合され、さらには、お客役である他者Nがお店でボールを買ったこと

から、ボールのやりとりへと移るといように実に多彩なイメージが盛り込まれた遊びが展開された。それに伴ってR君の言葉は次第に活発になり、「もの」の見立ても豊かになった。このような遊びの中では、常にお互いが「…しようか?」「…してもいい?」などと、他者を意識した言葉を交わし合い両者で遊びを作り上げた(表7)。

表7 イメージを介したやりとり

R	T
「自転車、自転車作ろうか?お姉さんの。」	「あ、やったー、作ってくれるの?おねがい。」
「作って。」	「やった。どんな形して作るんだろう」
「じゃあ、一人?違う違う、車作ろうか?」	「車?あー。」
「階段作ろうか?お姉さんの階段。」	「階段、ありがとう。」

このような遊びを背景として、従来はR君の要求を受け入れるだけであった他者Nが、R君に対して要求する場面があった。すると、R君はすんなりと聞き入れたのである。また、R君が他者Nのイメージに寄り添うことが多くなり、R君の他者Nに対する確実な愛着を感じる場面が多かった。

以上のように回を重ねる毎に、多彩なイメージを介して行われたイメージ遊びであった。しかしながら、初期の互いがイメージを共有してやりとりを交わし合う楽しい遊びが、後期になると次第に変化を見せた。二人で作り上げ、共有していたイメージが、R君のイメージ中心になった。つまり、R君は、他者Nのイメージを受け入れず、一人でイメージを作り始めた。そして、他者Nは、それに従うような関わりしかできなくなった。

第26回では、わっかをお皿に見立ておやつ準備をしたことから、保育園ごっこが始まった。さらに、その遊びがR君の「小学校」という言葉に変わり、小学校ごっこ、美容室ごっこに変わるといようにめまぐるしい変化を見せた。それに伴

い、R君の状態が次第に興奮し始めた。R君はイメージを持って、一人でしゃべりまくり留まることがなかった。そして、このような状態では、決まってR君の時間に対するこだわりが出た(表8)。R君は興奮状態になると、やりとりを交わしながら遊ぶことができなくなり、他者Nが言葉をかけるとその言葉を遮るかのようによく強い声で話した。また、自問自答が頻出した。さらに、他者Nが遊びに手を出すとそれを手で遮ることの増えた。そうすると、次第に他者NはR君のイメージに寄り添った言葉の関わりしかできず、マンネリ化した関係性の希薄な遊びになった。

表8 興奮状態

R	T
「朝の10時に開くからね。」	「はい。」
「朝の10時に開くからね。」	「朝の10時…」
「眠りまーす。」 「食べて、ご飯食べてから。お風呂入ってから眠りまーす。」	「眠りましょう。」
「11時、11時、8時に絵本読んで、ええっと9時に、10時に眠ろうね。」	「分かった。10時に眠る。」
「Rは、今何時？今？9時」	「笑う。」
「Rは何時に帰る。R？R1時に帰る。1時に帰る。」	「そっか。」

このような状態が回を重ねると、R君は遊びの中で他者Nの顔を見ることが減少して、他者Nに呼びかけることもなくなり、R君一人の遊びが継続された。他者NはもはやR君の意識に存在せず、イメージ遊びを言葉で支える壁的な存在であった。

しかしながら、そのような中でもR君の他者Nに対する愛着を感じられる場面があった。例えば、R君がクマの人形のことを「犬」と言ったのを、他者Nが「クマじゃないの？」と指摘すると、そ

の言葉に敏感に反応したR君は、急に静かになって下を向いた。これは、R君が他者Nとの関係を大切にしているからこそ間違いの指摘に敏感に反応したのだと考えられた。また、遊び初めには「お姉さんの家は何ていうところ？」などと他者Nのことについて聞いてきたことも、他者Nのことに関心があることを象徴していた。

この時期は人形遊びによって、前半はR君、Nのイメージを介しながら、遊びが展開した。しかし、後半はこの遊びにR君がのめり込み、結果として遊びが二人の関係を希薄にした。イメージ遊びは、関係を促進したり、抑制したりであったが、底流には第I期で作られた愛着関係があったことが確認できた。また、このような愛着関係があったからこそ、R君は人形遊びを展開させ、夢中になることができたと考えられた。

3) 第III期 (第31~37回)

人形を排除した生身での関わりと関係の深化

第II期において、イメージを介した人形遊びによって関係が希薄になってしまった打開策として、できるだけ人形を使用せずに、R君自身と他者N自身での生身での関わり、そして身体的関わりを意図して遊ぶことになった。初めは、R君が人形に向かうことが多くなかなか生身での関わりが困難であった。しかしながら、遊びは意図した通り次第に盛り上がった。

人形を使用しないで生身の遊びをするようになったことは、R君、他者Nがお互いをしっかりと意識したやりとりを導き、関係を絡ませた多彩な遊びを自然に展開させた。

例えば、他者Nの提案によってレストランごっこがなされた。その中では、他者Nのイメージを中心に、他者Nがお客さんになり、ウェイトであるR君に料理を要求した。R君は、他者Nの要求通りにウェイトになりきって準備をした。また、R君が中心になったステーキ屋さんごっこでは、R君がコックになり、ステーキを作った。R君は、他者Nをお客として意識しながら座る場所を教えたり、料理を運んだ。また、普通のかくれんぼのようにはいかなかったが、隠れる人と探す人の役割交代をしながら、かくれんぼ遊びをすることもできた。さらに、R君の父親についての話題を共有することもできた(表9)。このように、

表9 私生活の話題の共有

R	T
笑顔で飛び跳ねる。	「ぴよんぴよん…ほーら、ぴよんぴよん…」
	「R君、重たい？Nさん。持てた？持てた？」
「パパなんか、70キロあるよ。」	「わー、なにー、70キロ？」
笑いと戸惑いの混じった表情をして、カメラを見る 「70キロ」	「カメラお化け何キロか、聞いてごらん。」

生身での関わりが互いを意識させることを導いて、活発なやりとりが生み出された。従来なされたことのない、実に多彩な遊びであった。

このような遊びの中では、R君と他者Nの愛着関係がさらに深化したことを示す場面が目立った。例えば、R君が他者Nの意図と自分の意図をすり合わせて行動するときがあったり、時には他者Nをスムーズに受け入れて、柔軟に対応することが見られた。また、他者NがR君の気に入らないことをしても、間接的なやり方で拒否を示した。さらに、他者Nが遊びの途中に「暑いー」「疲れたー」などという、R君も同じような言葉を発した。さらに、他者Nと同様に暑がったり、三輪車から降りたりした。このような行動は、R君が他者Nと気持ちを共有していることの表れで、他者Nとそれなりの愛着関係が成立していてこそなされる行為であると考えられた（表10）。

表10 他者との気持ちの共有

R	T
「あー、疲れた。」 三輪車からおりて、 マットに座る。	「R君、ちょっとお休みしない？」
すぐに立ち上がって、 「疲れたからこれしよう。」 ボールにのっかる。	「これしよう」

第Ⅲ期は生身での関わりを意図したことが、R君と他者Nがしっかりと向き合い、互いを意識することを導き、結果として自然で多彩な遊びが成立した。さらに、そのような遊びの中では、R君が他者Nを愛着対象としていることが明確に感じられ、両者の愛着が深化していることを再確認した。

4) 他者Nとの関係のまとめ

撮影者として関わったNが、第20回からは他者NとしてR君と関わるようになった。R君ははじめ、明確な不安は示すことはなかったが、他者Nと面と向かい合って遊ぶことができずに「もの」に向かった遊びをした。また、言葉も少ない上に面と向かって会話が成立することはなく、明確に他者Nとの心理的距離が存在した。

しかし、このような状態もダイナミックな遊びを盛り込んだセッションを重ねるうちに、次第に変化を見せた。R君は他者Nと面と向かい合って遊び、やりとりが可能になり、そのような中では他者Nをしっかりと意識して遊ぶようになった。その表れとして、他者Nの模倣をしたり、他者Nに直接的要求をした。また、要求は母親と同様の甘え声でなされるようになった。さらに、他者Nに自ら身体接触をしてきたり、相次いで他者Nへの愛着行動が出現した。

そしてそのような状況を背景として、R君と他者Nの間で人形を使ったイメージ遊びが多彩になった。このような遊びは、前半は二人の距離をぐんぐん縮め関係を促進する遊びであったが、次第に関係を希薄にする要因となった。そして、その打開策として人形を排除した、生身での関わりを意図した。すると、以前のように二人の間では活発にやりとりが交わされ、ごっこ遊びに留まらず、ダイナミックな遊びへと発展し、二人の関係はみるみるうちに活性化した。そのような遊びを背景としてR君の他者Nに対する愛着は深化し、確実なものとなった。

3. 他者T、他者Nとの本児の関係の関連

ここでは特に、他者Tと他者Nとの本児との関係における相違点について述べる。

R君はセッションを重ねる毎に、他者T、Nと

の愛着関係を成立させ、さらに深化させた。ここでは、それぞれの関係におけるR君の愛着形成のプロセスと時期について、いくつかの相違点を検討する。

まず、一つ目に愛着関係が形成していくまでのプロセスとして、ダイナミックな遊びを通して関係が接近したことについてである。他者T、Nとのそれぞれの遊びにおいて、R君はトランポリンや追いかっこなど、大きな体の動きが引き出される活発な遊び、他者との身体接触の機会が多い遊びによって他者との関係を接近させた。このことは、R君の人への接近方法がダイナミックな関わりによるものだとすることを示した。

二つはダイナミックな遊びを通して関係が接近してしばらく経つと、「もの」を介したイメージ遊びが出現したことである。さらに、このような遊びの中で、活発なコミュニケーションが促されたこともT、Nの両方の場合に共通している。このことは、「もの」を介したイメージ遊びによって、R君のコミュニケーションが促進されたことを示す。

三つは他者との関係の深化に伴い要求の仕方が変化していくことである。R君は他者と関係が成立していないときには志向性が感じられず、また間接的な要求をした。しかし、関係の接近に伴って、要求する対象である他者をしっかりと見て、時には指さしを伴う明確な要求の言葉で直接的に要求した。さらに、愛着関係が成立すると、他者への要求は直接的であり、かつ強い口調で感情を込めたものに変化した。そして、母親にするとときと同様の甘え声での要求も度々聞かれた。このことは、他者T、Nとの関係で共通した要求の変化であった。

四つは授受行為についてである。他者Tとの関係では、第4回に他者Tが「先生も欲しいな」という要求をだすと、それに応じてR君が自分の持っていた「もの」を拾って他者Tに授受することが見られた。第8回以降には、この行為が進展して、他者Tのクッキーの催促に対してR君が自分のものを分けてあげた。他者Nの場合には、他者Nが催促していないにも関わらず、自分と同じレベルを他者Nにわたす行為が見られた。これらは、愛着関係にもとづいたR君の授受行為の発達を示した。

五つは愛着関係の成立した時期についてである。他者Tとはセッションの第5回、他者Nとはセッションの第4回目に愛着関係が成立したと見なした。このように愛着関係が成立した時期はほぼ同じであるが、他者Nとの関係では母子分離がほとんどなかった分、関係接近の速度が他者Tとの関係に比較して速かった。これは、他者Tとは初めてであったその日、つまり場に対する不安と人に対する不安が強い時期からセッションが始まったことに対して、他者Nとはセッションをする以前に既におよそ20回も顔を合わせ、場を共有していたことが大きく影響したためだと考えられた。このことは、R君に対人社会的な力がついてきたことに加えて、特に関わりを持つてはいなくても何度も顔を合わせ場を共有していたことが関係を形成しやすくしていたことを示した。

六つは呼び名の定着についてである。他者Tとの関係においては愛着関係の成立に伴い「先生」という呼名が定着したのに対して、他者Nに対してはセッションの終わりまでなかなか呼び名が定着しなかった。この違いは、他者TはR君に呼ばれた通りに自分を「先生」と呼んでいたのに対して、他者Nはそうはしなかったからである。つまり、他者NはR君に「先生」と呼ばれても撮影者であった以前のくせがとれずに「お姉さん」、時には「私」とした。従って、R君は他者Nに影響され「先生」と呼んだり「お姉さん」と呼んだりして呼名が混在していた。このような状態はセッションの終わり近くまで継続された。しかしながら、セッションの終わりにはR君は「Nさん」と名字で他者Nを呼び、呼名は定着の兆しがみられた。

4. 関係の変化に伴う他領域の発達

R君は母親との関係の変化そして他者との関係の変化を軸にして、様々な領域の発達を遂げた。ここでは、関係に伴う他領域の発達について検討する。

1) ふり遊び

R君のふり遊びが出現するようになったのは、他者Tとの関係が接近のプロセスにある時期であった。それ以前のふり遊びは、「動作的表象としてのふり」で、R君の過去の経験で特に印象に残っ

ていると思われる場面を行為によって立ち上げる、いわゆるコピー的なふりであった。また、そのコピー的なふりは個々のユニットに閉じられたもので遊びとしての流れはなく、またそのイメージを他者と共有して楽しむことに欠けた。

ところが、回を追う毎にこの「動作的表象としてのふり」が次第に変化した。例えば、R君は「家」の一つを他者Tの家に見立て、それを棒で叩いて掃除するふりをした。次に棒で叩く音から、R君の家の近所で行われているスーパーの内装工事を連想し、内装しているふりを始めた。次に、内装によってでき上がる予定の薬屋さんをイメージし、掃除に使っていた木の棒を栄養ドリンクに見立て、薬局で売っているお菓子をイメージして積木を準備し、それを「家」の中に入れて薬屋さんのふりをして遊ぶのである。これは、本質的には「動作的表象として」のふりであるが、初めに立ち上げたイメージをもとに動作をすることによってそれが個々の場面のみを立ち上げるのではなく、連鎖したイメージがわき出て新しい遊びを作り出した。R君のふり遊びが個々のユニットに閉じた状態から解放され、大きなまとまりある、流れのあるスクリプトとして成立するようになった。

他者Nとの遊びに移るとR君のふり遊びはさらに進展し、他者とのやりとりの中で、他者の意図をも柔軟に取り入れながらふり遊びを楽しむことができるようになった。それ以前のR君のふり遊びでは、他者がR君のイメージに寄り添った関わりをすることが多かったため、R君の経験のみがイメージの中心になった。ところが、他者Nがイメージを提示して関わるようになったことを契機にR君のふり遊びは変化した。例えば、電卓を見つけて店員のふりを始めるR君がお店ごっこを、お客役の他者Nがお家へ帰るという設定でお家ごっこを始めると、R君はお店とお家を行き来しながら遊びを進めた。つまり、他者Nの提案によりR君のごっこ遊びの場面が店の場面からお家の場面へと広がり、複数のスクリプトでごっこあそびが展開したということである。さらに、その遊びの中ではR君のお店に幽霊がいることをイメージして、怖がりながらお店のドアを閉めるふりをする場面があり、R君のイメージが現実世界ではほとんど体験しないことまでにも広がりを見せる柔

軟なふり遊び、つまり「象徴行為としてのふり」遊びをも可能にしていることが伺えた。

以上のようにふり遊びが次第に広がりを見せるのに伴い、「もの」の見立ても質量共に豊かになった。また、言葉の発達も伴って次第に自分が見立てている物について「これは…」だと説明を加えることがも増加した。さらには、以前は「栄養ドリンク」に見立てていた木の棒を人参に見立て、その木の棒を見ながら「前はマエビタ（栄養ドリンク）だけどこれは人参」というように木の棒を二重化していることについて言葉で説明することも見られた。これは、R君が「もの」の二重化をしっかりと理解していることの表れであり、同時に自閉性障害においては獲得が困難とされる「真の象徴能力」の表れであると考えられる。しかし、このようなことは出現の数が少ないため、さらなる検討が必要である。

2) コミュニケーション、言葉の発達

他者Tとの関係の接近に伴って、増加した「もの」を介したイメージ遊び、玩具の増加を契機にR君は他者とのコミュニケーションが活発になった。愛着関係の成立に伴い、遊びがダイナミックなものから「もの」を介したごっこ遊びになると、遊びのイメージに言葉が誘発された。それ以前は、他者との会話にはエコラリアが多かった。また、2語文、3語文というように短い発話長であった。言葉のやりとりのターンもほとんどが1ターンであった。しかし、ごっこ遊びがなされるようになって後には、発話長が長くなり、エコラリアの減少に伴って、他者との会話のターンも増加した。また、このような会話のターンの多さ、発話長の長さというように量的な発達に加えて、他者Nとの遊びに移る頃には質的な発達もめざましく発達した。その一つとして、「もの」を介したイメージ遊びでは人形を使って、驚きや喜びの感情を込めたプロソディックな表現をしたり、一人二役的な言葉を発した。二つは、初めは自分自身の意志や行動を言語化することが多かったのに対して、他者性を考慮した言葉を使用することが増えた。例えば、以下のようなことがあった。窓の外にある進入禁止のマークの入った障害物を見て、他者Nに対して「ダイエーにもあるよ」と情報を提供する言葉、「…しようか」「…しても良い？」と他者

に同意や許可を求める言葉、「何でお姉さんしょっちゅうしょっちゅうカメラやるの？」他者の意図を探る言葉、「ほらほら、見て。」他者に共同注視を求める言葉、「疲れたね」「暑いね」などの他者と気持ちを共有する言葉である。さらに、驚くべき事に、数は少ないが自閉性障害児が理解困難とされている語用論的理解もした。R君は母親との遊びの中で、撮影者がR君の「通り中」という言葉を聞き違えて、「え？工事中？」という、「通り中だぞー。」といいかえてあげた。これは、R君が撮影者の言葉を字句通りに理解したのではなく、文脈の流れの中で撮影者の誤った理解を理解した故に答えることができたのだと考えられた。

このように他者との関係を通して出現するようになったふり遊びを通して、R君のコミュニケーション、言葉がめきめきと発達した。

その中で、数こそ少ないが語用論的理解を可能にしつつあることは、これから先、言葉がさらに発達することを強く期待させた。

3) こだわり

筆者は、毎回、R君が母親と遊ぶ場面もVTRに収めた。そして、母親との遊びの中でR君のこだわり行動が頻出することを見いだした。その原因として、母親との遊びでは、母親の教示的な関わりが多く、R君に不快をもたらされることが多かったためである。他者との関係においてはこだわりの数が少なく、それをもたらす要因も遊びの停滞や不快に因るものではなかった。他者に対して不安があり、関係が取れていない時期に出現するこだわりがほとんどであった。また、関係が成立して後にも他者がR君に不快を与えるようなことはほとんどなかったため、こだわりとして表れることはなかった。

R君のこだわりは、はじめは例えばトランポリンの周囲を荷車を引いて回転したり、紙に字を書くというものであった。そして一度そのこだわりに入ってしまうと、たちまち母親の働きかけにも応じなくなり、母親との関係を閉ざした。母親がそのこだわりから脱出させようとあの手この手で工夫しても駄目であった。R君自身でこだわりを区切りをつけるのを待つと何分、何十分でも継続されるほどのとても強固なこだわりであった。

ところが、R君の強固なこだわりが母親の関わり

りによって次第に柔軟になり始めた。ある日、R君はわっかで数字の「8」を作り母親に見せた。しかし、R君の数字に対するこだわりを気にしている母親は「8はいやだな。」と拒否し続けた。すると、R君たちまち部屋中を数唱しながら歩き回るのである。その時、母親がR君のこだわりをとめようと、積木を使って通り道を塞ぐとR君は母親のこの働きかけを面白がって遊ぶようになった。つまり、母親の働きかけによってR君のこだわりが母子の遊びに変化した。このように、R君のこだわりは他者の関わりによって柔軟になり、別の遊びへと変えていけるようになった。しかし、R君自身の状態が不調なときには、他者を受け入れることのない以前のような強固なこだわりが出現した。

R君のこだわりはますます変化し、母親との遊びでこだわりが出現しても、すぐに母親とのやりとりに戻るというように自分でこだわりを終結するようになった。従って、こだわりがこだわりとして明確なものではなくなり、遊びの文脈に取り込まれた形に姿を変えた。

従来、自分の不快をこだわりによって表していたR君であったが、こだわりの減少に伴い、場を変えたり、遊びを変えたりすることで不快を解消できるようになった。さらに、初めは一人だけで解消したのを、「あれで遊ぼう」「これしよう」などと母親を誘うことにより、結果としてこだわりが消失することにも見られた。

このようにR君のこだわり行動は変容した。R君のこだわりは、他者の働きかけにも全く揺るがない強固なこだわりから、他者の働きかけに反応し、こだわりを共有の遊びにする柔軟なこだわりへと、他者の働きかけを必要とせずに自分自身でこだわりを終結させ、他者とのやりとりへと戻る自己終結のこだわりへと変化した。最終的には、こだわりがこだわりとして目立たなくなった。つまり、こだわりが消失したと言えるまでになった。

このようなこだわりの変化は、丁度、R君のコミュニケーションがめきめきと発達している時期、そしてふり遊びに広がりが見られる時期と同時であった。このことから、母親の働きかけの変化とともにR君自身の認知的な発達、さらにそれらの発達を支える他者との関係が大きく影響したと考

えられた。

IV. まとめ

1. 他者との関係の形成

対象児Rは、初めてのセッションにおいて、新奇な場所や人に対して明確な不安を表出した。特に他者Tとの遊びにおいては、第4回まで明らかな母子分離不安が出現した。しかしながら、初回から他者と「もの」を紹介したりとりが可能になり、接近の兆しが見られた。さらに、回を重ね、ダイナミックな遊びを通して他者との心理的な距離が接近するにつれ、R君の分離不安は軽減し、第5回頃からは他者へ対する愛着行動が相次いだ。そして、R君は他者Tを別府（1994）の言う「不安・不快な場面で求める」対象、「不安・不快な場面に立ち向かう安全基地」としての対象として理解するようになった。このことは、R君が他者Tとの愛着関係を確実に深化していくと同時に、他者理解の質を変化させていることを表した。

また、他者がTからNに交代されてからも、初めは他者Tに対する思いと他者Nへの不安が原因で遊びが展開しなかった。しかしながら、初回からダイナミックな遊びがなされるなどして接近の兆しは見られた。また、他者Nについても回を追う毎に確実に愛着関係を成立させ、「不安・不快な場面で求める」対象、また「社会的参照」の対象として他者を理解することができるようになった。

2. 関係形成と他領域の発達の間連

対象児Rは他者との関係形成に伴い、象徴機能を初めとする様々な発達が見られた。

ふり遊びについては、初めはほとんど他者を意識することのないもの、またある単一のユニットに閉じたコピー的なふり遊びであった。しかし、他者とのやりとりを通して次第に広がりのある象徴的なふり遊びの色を帯びるようになった。言葉についても、初めは自分自身に向けられた言葉やエコラリアが多かったが、次第に他者性を考慮した言葉を発するようになった。さらに、こだわりについても、はじめは他者がどのように関わっても変化を見せない強固なこだわりであったが、次

第に他者の関わりによって柔軟になり、次第に消失することになった。

このように、生まれてからずっと生活を共にしてきた母親以外の他者と関わりを持ったことで、R君の発達はめざましく変化した。これは、母親に対しては既に自分自身の持っている言葉や遊びがそのまま通用するのに対して、他者にはそのままでは通用しないということを感じ、そのことが、言葉や遊びを発達させる要因になったのだと考えられた。つまり、母親とは異なる愛着対象、つまり他者からの刺激によって本児の発達が促されたと言することができる。

3. 他者の複数化の影響

対象児Rには、時期を分けて特定の他者が2人関わった。初めの他者Tから、他者Nに交代したことで見られた変化は二つあった。一つ目に他者との関係形成の速度が速くなったこと、二つ目に他者との意図のすりあわせができるようになったことである。

はじめに、他者との関係形成の速度が速くなったことについて述べる。他者としてはじめに関わった他者Tとの愛着関係が成立した時期よりも、他者として2番目に関わった他者Nとの場合では愛着関係の成立の時期が早かった。これは、他者Nが他者Tとのセッション時から撮影者として関わっていて、すでに顔見知りであったことも原因の一つにあるだろう。しかし、それだけではなくR君が以前と比較して他者との関わりを持つ力を伸ばしたためではないかと考えられた。

R君は他者Nとの初めての遊びにおいて、初めから追いかけてこをするというように、ダイナミックな遊びをし始めた。これは、他者Tの時にもなされた遊びであり、他者Tとはこのようなダイナミックな遊びをすることによって関係が接近していた。R君が他者Nとの遊びで早速、追いかけてこをして遊び始めたのはこのようにダイナミックに動き回ることが他者へ接近する際に有効だということを学習したためではないだろうか。他者Tとの関係が土台となって、他者Nとの関係を形成しやすくしていたために、愛着関係の成立時期が早まったのだと考えられた。

二つは、他者との意図のすりあわせについてで

ある。他者Tとの関わりでは、他者Tから自分の意図とは異なることをされると、自分の意図を押し殺して他者Tに寄り添ったり、もしくは拒否の行動をとったりと極端な行動をとったR君であった。ところが、他者Nとの関わりではセッション後半になると、自他の意図が食い違ったときに他者の意図と自分の意図をすり合わせて行動を決定することが出現し始めた。

他者T、Nそれぞれとの関係の中で、意図がずれた場面でのR君の反応は明らかに異なった。その背景として、T、Nの働きかけの違いが挙げられた。具体的に述べると、他者TはR君に寄り添い、受け入れる姿勢をとることが多かったのに対して、他者Nは意図をぶつからせて関わるが多かった。他者Nの関わりによって、R君は自他の意図の違いを感じたと思われた。そして、このことがR君の他者との意図のすり合わせを導いたのだと考えられた。

以上のことは、異なる複数の他者と関係を形成することが様々な働きかけや刺激を受けることになり、他者との関わりにおいて柔軟性を生み出すことを示唆した。

4. 関係接近への有効な手段

対象児R、Mの両者において、他者との関係が接近するきっかけとなったのが、ダイナミックな関わりであった。このことは、同時にダイナミックな関わりが他者との関係の接近に有効な手段であることを実証している。

身体的にダイナミックな関わりは大きく活発な体の動きを引き出し、それが心身のリラックスを導く。互いがリラックスした状態では、身体接触と共に他者と情動を共有する機会が多くあり、そのことが両者の心理的な接近を促進すると考えられた。

ダイナミックな動きによって得られる「快」は、どのような子どもにおいても有効だと思われるが、他者と関係を取り持つことに困難を示す自閉性障害児においてはとりわけそうだと言える。つまり、コミュニケーションに問題を持っていることから、認知的な部分に働きかけるよりも身体に働きかけることが優先されるのではなかろうかと考えからである。その先のさまざまな発達は、本研究の事

例から他者との関係性に大きく関与するのではないかと考えられた。つまり、他者との良好な関係が彼らの発達を促進する大きな要因だと言うことである。

V. 今後の展望

対象児Rは、複数の他者との関係の形成により、対人関係において次第に柔軟な姿勢をとることができるようになった。しかしながら、彼の生活の多くを占めている幼稚園での生活では、同年齢の子どもと関係がつかれないという問題が残されている。大人とは比較的スムーズに関係を持つことのできるR君が、同年齢の子どもとでは困難を示す背景には、相手の関わり方があることが考えられる。

大人はよりよい関係を持とうと、R君を理解することにつとめながら関わるのに対して、子どもはそのようなことはしない。ただ自分の意のままである。従って、子ども同士の関係ではR君自身に不快がもたらされることが多く、それを回避するために子どもとの関わりに困難を示すのではないかと考えられる。

しかしながら、セッション後期のR君の状況を見ると、他者とのすりあわせをしながら柔軟な対応をすることができるようになった。このことは、R君が子どもとの関係にも大きな可能性を秘めていることを示していると考えられる。従って、特定の他者を大人から同年齢の子どもに交代してセッションを行うことが大きな意味を持つと考えられた。

本研究は、自閉性障害児における他者との関係形成の有効性を示すと同時に、自閉性障害児に組織的に関わることの重要性をも示唆した。

現在、障害児の統合保育が普及し、一般の子どもと共に障害児を生活させさえすれば何かが変わると考えている人も少なくない。単に生活を共にさせ、特別な手だても施すことなしに何が変わるのだろうか。もしかすると、何らかの変化は見られるかも知れない。しかし、彼らの最大限の可能性を引き出すには、自閉性障害児一人一人に合った組織的な関わりを継続して行うことが重要であり、不可欠であると考えられる。そして、このことは

常に他者との良好な関係を基盤とすることを忘れて
たくない。

VI. 謝 辞

本研究の対象となったR君、お母様は、2年の
間、セッション通って下さいました。どんな状況
でも、積極的にセッションにのぞんで下さったお
二人の姿に励まされること度々でした。とても素
晴らしい母子に恵まれ、そのお陰で一通りの研究
を無事終えることができました。R君、そしてお
母様に心より深く感謝申し上げます。

<参考文献>

- 1) 麻生 武 (1980) : 子どもの他者理解—新しい
視点から—。心理学評論, 23(2)
- 2) 麻生武 (1997) : 乳幼児期の“ふり”の発達
と心の理解。心理学評論, 40(1)
- 3) 岡本夏木 (1982) : 子どもとことば。岩波新
書
- 4) 木下孝司 (1995) : 子どもが「心」の存在に
気づくとき。発達66, No66, Vol.17
- 5) 小泉 毅 (1987) : 乳幼児の発達と行動—主
として自閉症と他の発達障害との比較から—,
自閉症の研究と展望, 東大出版, 山崎晃資,
栗田広
- 6) 小林隆二 (1995) : 自閉症児の発達精神病理
と治療—障害発達の視点から—児童青年精神
医学とその近接領域, 37
- 7) 小林隆二 (1996) : 自閉症の情動的コミュニ
ケーションに対する
- 8) 治療的介入—関係性の障害の視点から—。児
童青年精神医学とその近接領域, 37(4)
- 9) 杉山登志郎 (1992) : 自閉症の内的世界。精
神医学34(6)
- 10) 玉井収介 (1983) : 自閉症。697講談社現代
新書
- 11) 十亀史郎 (1985) : 講座発達障害, 指導法Ⅲ
自閉症
- 12) 別府 哲 (1994) : 話し言葉を持たない自閉
性障害幼児における特定の相手の形成の発達。
教育心理学研究, 42
- 13) 別府 哲 (1997) : 自閉症児の愛着行動と他
者の心の理解。心理学評論, 40(1)
- 14) 山崎晃資 (1987) : 自閉症研究の歴史, 自閉
症の研究と展望, 東大出版 山崎晃資, 栗田
広
- 15) 山崎晃資 (1997) : 自閉症。別冊22。発達障
害児
- 16) フランシス・ハッペ (1997) : 自閉症の心の
世界—認知心理学からのアプローチ—。星和
書店
- 17) 石坂好樹, 神尾陽子, 田中浩一郎, 幸田有史
(訳)
- 18) Leo Kanner (1943) : Autistic Disturbances
of Affective Contact
[Nervous Child, II;217-259, 1943]
翻訳と解説 牧田 清志
精神医学・1976年・8月